

ゲール東京に現る (トーキョーゲール)
推理サイボーグ真田志郎の事件簿5 (第三稿)

遠野秋彦

ブローグ

彼は目覚めた。

彼は死んだはずだった。

しかし、どういいうわけか死なずに済んだらしい。

彼は身体を起こした。

見知らぬ場所だった。

当然だった。彼が死んだのは宇宙空間だ。彼が乗っていた宇宙船は爆発して果てた。同じ場所にいたら、既に死んでいて当然だ。

彼は辺りを見回した。

原始的な大都市だ。

ピンク色の肌の男女がせわしげに歩き回っていた。

彼は手に持った翻訳機を動作させた。

急に意味不明の異国の言語が理解可能になった。

しかし、それで状況が飲み込めたわけではない。

言葉の意味が分かっただけで、語られる内容まで分かったわけではないのだ。

彼は慌てて手近な人間を捕まえて質問した。

「ここはどこだ」

「深川だよ」

「フカガワという都市なのか？」

「深川は都市って感じではないよね。都市って言うならもっと東京の都心に行かないと」

「トシン？ それが都市の名前か？」

「トシンは都会の中心のこと。東京が名前だよ」

「そうか。トーキョー。それがこの名前か」

彼は翻訳機を辞書モードに切り替えて質問した。

「トーキョーはどこ惑星だ。すぐに調べろ」

翻訳機は答えた。

「地球上の都市です。デスラー紀元102年に地上の都市は完全に消滅。」

地下にシェルター都市が残存してはいますが、存続は時間の問題とされます」

「馬鹿な。今ここに見える都市には、地上に都市があるではないか」

「当翻訳機のデータはデスラー紀元103年現在となっております。その後復興されたとすればデータと食い違っている場合があります」

「今は何年だ」

彼は慌てて年号を確定できそうな方法を探した。

また手近な人を捕まえて質問した。

「今はデスラー紀元何年だ」

「デスラー紀元、なんだそれは？」

彼は反省した。

野蛮人はデスラー紀元を知らないかもしれない。

だが、翻訳機の年号変換機能を使えば現地の暦との相互変換ができる。

「おまえ達が使っている暦が良い。今年は何年だ？」

「今年は2015年に決まっているじゃないか」

相手はそのまま行ってしまった。

彼はすぐに翻訳機に命じた。

「地球の暦をデスラー紀元に換算。2015年はデスラー紀元何年だ？」

「換算不能。地球の西暦2015年の時点で、まだデスラー紀元は開始されておりません。デスラー紀元1年よりも手前になります。先帝の暦で再計算しますか？」

「それはいい。私が宇宙船の爆発に巻き込まれたのはこの星の暦で言う
と何年だ？」

「西暦2200年となります」

「馬鹿な、200年近く過去に飛ばされたというのか！」

彼は絶句して黙りこんだ。

そして空を見上げた。

彼はどうして良いか分からなかった。

親切な食堂の店主が、深川めしを彼におこるのはまだ三日後の話だった。

第1章

島は振り返った。

「やあ古代。おまえもここを選んだのか」

「島もここかよ。これじゃダメだ」と古代はうめいた。

【舞浜の大江戸ランド】の館内には、クラスメートが何人もいた。

専門性の高い博物館、美術館を調べる課題をこなそうとここまで来たが、同じ題材を選んで誰かと比較されてしまう。それは避けたかったので、少し大学から離れた場所を選んだはずだった。だが、考えることはみな同じだったようだ。

「ダメな博物館でごめんね」と中年の美女が古代に声を掛けた。

「あなたは？」

「館長の瑞星久遠です。ここは予算が足りなくてね。十分な展示ができていないのは重々承知しています。でも、もしかしたら半年後はもう無くなっていくかも知れないので、ちゃんと見ていってね。記念にはなるわ」

「金が足りないなら、なんでこんな施設を？」

「昔はあったのよ。元祖スマホはうちの会社で開発したのよ。一時は人氣があつて大もうけしていたけど、それはもう昔のことよ」

「そうだ。問題があるなら真田さんに相談するといい」

「真田さん？」

「推理サイボーグというあだ名を持つ僕らの先生。最強の知性の持ち主なんだ」

「聞いたことがあるわ。京葉技術大学の推理サイボーグ。でもこれはお金の問題だからダメね。別に殺人事件があつたわけではないの」

「ダメですか」

「でも何か推理力が必要な時には思い出すわ。教えてくれてありがとう」

「でも、ここはクラスメートが多くて。もっと他の博物館か美術館を調べたいですよ」

「もっと他？」

「専門性が高ければそれでオッケーですよ。あと京葉線沿いはきつとラ

イバルが多いからダメ」

「夢の島の第5福竜丸や熱帯植物園はダメってことね。じゃあどこがい
いかしら？」

その時、通りかかった職員が言った。

「それなら、東京都の現代美術館なんてどうでしょう？ あそこはそれ
ほど遠くないし、建物も面白いし、複数の特別展も同時にやっついて、話
題は多いですよ」

「それどこですか？」

「清澄白河の駅から降りて歩けるよ」

「何線？」

「大江戸線」

「行ってみます」 古代は喜んでうなずいた。

トイレに行っていた雪が戻って来た。

「お待たせ。それじゃ見学する？」

「それより、清澄白河だ。はやく行こう」

「ちよつと待って」 雪は抗議した。それはそうだ。せっかく入ったのに
まだろくに見てもいないのだ。

古代と雪は、電車を乗り継いで清澄白河駅を目指した。

駅を降りると、すぐに深川だった。

深川めしの看板を見て古代は腹が鳴った。

「なあ、食っていかないか？」

「ダメよ、調査に行くのが先よ」 雪は寄り道を許さなかった。

やがて、変な形の建物が見えてきた。

東京都現代美術館だった。

古代と雪は中に入ってみた。

とりあえず、常設展のチケットを買って一回りしてみた。

あまり良く分からなかった。

がっかりして常設展から2人は出た。

古代と雪は、後から声を掛けられた。

「これを落としましたよ」

相手は中年の男だった。

「ああ、ありがとう」

古代は慌てて紙を受け取った。

「課題か何かですか？」男は言った。

「そうですね。専門性の高い博物館・美術館に行つて、一般的な博物館・

美術館との違いを調べよつて。大学の課題ですよ」

「それで、この東京都現代美術館に」

「そうそう。それ」

「どこの大学ですか？」

「京葉技術大学」

「工業大学じゃないですか」

「工業大学だから工学の授業だけつてことはないですよ」と古代は頭をかいた。「本当は、やりたくないんだ」

「ははは。やはり実験でもやつていた方が面白いですか？」

「まあね」

「でも、なんでここまで。舞浜の大江戸ランドもあるでしょう」

「いやね。みんな手近なところで探すだろうから京葉線沿いはかぶる確率が高いんですよ。出来の良いレポートを書かれちゃうと、比較されて見劣りするもので」

「ははは」と男は笑つた。「大江戸ランドで日本橋でも見てきた方が良かったかも知れないよ、少年」

古代は背中をドンと叩かれた。

「ここは難解な現代美術も多いからね。訳が分からなくてレポートを書けないかもしれないぞ」

「おじさんは分かるのですか？」

「分かるとも。こういう美術品好きなのでな」

そこで雪が話に割つて入つた。

「失礼ですがお名前は？ 掃除夫に見えますが」

「迎流脩（げるおさむ）」という。見ての通り、掃除もやっているがこの美術館の下っ端の何でも屋だ。ゲルと呼んでくれ」

「下っ端って、それで楽しいのですか？」

「楽しいぞ。何しろ仕事をしながらいくらでも美術品を見られる。こんなに楽しい仕事は無いぞ。わっはっは」

「そんなに楽しいですか？」

「昔の上司は、それはそれは美術品への理解がなくてな。赴任早々、わしのコレクションの趣味が悪いと言って全て壊したほどだ。それに比べれば、今の上司は美術品に理解があつて最高だ」

「そんなものですか」 古代は考え込んだ。

雪はメモに書き込んだ。「これがこの美術館の特徴……っと」

「じゃあ、少しはアドバイスをくださいよ。どこを見たら少しは分かりやすいですか？」 古代はアドバイスをせがんだ。

「そうだな。去年の夏なら、スタジオ・ジブラルタル展をやっている、少しは分かりやすかったかな」

「スタジオ・ジブラルタルって、となりのとろろご飯ですか？」

「天空の素人・ラピュタンとか。あのアニメ作ってる会社？」

「そうそう。客寄せの目玉が欲しいから、そういう企画展もやるよ」

「今はやってないんですか？ アニメ関連の企画展」

「やってないこともないが。ほらあれ」

「流体関節人形展？」

「イノセントという難しいマイナーな芸術アニメ映画の関連企画展」ゲルは説明した。

古代は聞いたこともなかった。

「イノセントとは、惑星ゾラにいと設定された種族の名前だ」

説明されても分からなかった。

「まあいいさ。見ていくといい。今見ておけばいつか分かる日も来る」

「今分からないとダメなんです！ レポートが書けません！」

「そうか？」ゲルは考え込んだ。「じゃあ、近くの深川江戸資料館に行っ

てみるのはどうだ？ 小名木川の向こうになるが田河水泡のらくろ館というのもあるぞ」

「のら……なんですか？」

「のらくろ館。そうか、おまえ達の世代だとのらくろも知らないか」

「知りませんよ」

「みなしごの黒い犬が軍隊に入ってたな」

「それは殺伐としてそうだからパス。もう1つの深川なんとかで」

「しようがないな。地図を書いてやろう」

ゲルはメモ用紙に地図を書いた。

「ここが深川江戸資料館」とゲルは名前を書き足した。しかしそれは古代の知らない文字だった。

「おっと、うっかりガミラス文字で書いてしまった」とゲルは塗りつぶして日本語で書き直した。「ここだ」

「ガミ……なんだって？」

「それは忘れてくれ」

古代と雪は顔を見合わせた。

「深川江戸資料館は、それなりに面白いぞ。実物大で江戸時代の街並みが再現されているからな」ゲルは笑った。

古代と雪は、ゲルに礼を言って深川江戸資料館に向かった。

しかし、そこで見たのは同じアイデアでそこを訪れていた数人のライバル大学生達だった。

「ダメだこりゃ」と古代は落胆した。

「まあ一回り見学していきましよう」と雪が慰めた。

大学に戻ると、すぐにクラスメートの南部につかまった。

「なあ古代。青い肌のゲルを知らないか？」

「は？」

「肌が青くて名前はゲール」

「外国人に知り合いは居ないよ。って青い肌の人なんて外国人でもないな

「ひい」

「でもいるはずなんだよ」

「事情を話せよ」

「実はさ、遠い親戚で遺産相続問題が起きてさ」

「どんな親戚なんだよ」

「瑞星平九朗」

「知らないな」古代は首をひねった。

「私知ってる。スマホの父でしょ？」雪は即答だった。

「当たり前だ。スマホの元祖、スマフォーンを開発した会社の社長。でも、

趣味では昔のテレビドラマの研究家だった。少年少女ドラマシリーズが特に好き。どんぶりにかける少女の話は何度も聞いたよ」

「あ、その映画見たことあるけど、昔じゃないぞ。最近だぞ」

「馬鹿。それはリメイクだよ。元祖は1970年代だ」

「で、それが青い肌のゲールとどう関係するんだ？」

「【遺産は青い肌のゲールに】という遺言が問題になっているんだよ。一応、その遺言を尊重することで遺族の意志は統一されているのだけだね。その青い肌のゲールが問題なんだよ」

「いるはずがないよなあ。肌が青い人なんて。誰にも遺産をあげたくないって意味じゃないのか？」

「馬鹿、死んだ後で財産は使えないぞ」

「そうか……」古代は考え込んだ。

「ねえ。もしかしたら、青い肌のゲールって、肌が青いゲールさんがどこかにいるという意味ではなくて、何かのヒントじゃないかしら」雪が言った。

「暗号みたいなものか」

「ネットを検索してみよう」南部がタブレット端末を鞆から出した。「青い肌のゲール……つと」

「何かあったか？」

「あったあった。ええと、青い肌のゲールとは、1966年の少年少女

ドラマシリーズのテレビドラマ【宇宙戦艦大和】の登場人物。青い肌を持つ人種が住んでいるガミラス星の出身。ただし、実際に出演したビデオテープは残っておらず、また、撮影が際に急遽追加されたキャラクターなのでシナリオにも記載が無く、詳細は一切謎に包まれている……か。残された資料は当時の雑誌に掲載された不鮮明なモノクロ写真のみ。画像はあるが、見ても良く分からないな。まあ、あの人なら少女ドラマシリーズの話題を口にしてもおかしくないが」

「なんだ、それじゃぜんぜん分からないじゃないか」

「でも、それが何かのヒントだとすると、分かっている情報だけでヒントになるはずよ」と雪が力説した。

「と言われても何も思い付かないよ」

「森君はどうだ？」と南部は質問した。

「私にも分からないわ」

南部はとぼとぼと帰って行った。

しかし、他のクラスメートを発見するとすぐにまた同じ質問を始めた。

古代と雪は顔を見合わせた。

「少し早いけど学食で夕飯にしようか。実は俺、腹が減っちゃって」と

古代は言った。

「いいわよ」雪はうなずいた。

古代と雪は食事をした。

満腹すると、いろいろ考えるゆとりも出てきた。

「ヒントはきつと【もう残っていない】という部分だと思ろぞ」と古代は言った。「つまり財産はもう残っていないってことだろう？」

「残っていない財産のために南部君が大騒ぎするかしら？」

「うーん。じゃあ1966年に何かヒントがあるんだ」

「過去には行けないわよ」

「それじゃ、なんだっけ。シリーズの名前」

「少年少女童話シリーズ？」

「童話じゃなくてドラマじゃなかったか？」

「そうだっけ？」

「スマホで検索してみよう。ええと少年少女ドラマシリーズと。小バエ作戦、狙われた学ラン、夕焼けはただ夕焼け色、紫外音楽、つぶやき岩の秘密基地、未来から現代への挑戦。うーん、良く分からないな。僕らでも分かるヒントというのなら、たぶん違う」

「じゃあもう一度青い肌のゲールに戻りましょうよ。何かキーワードがあるはずよ」

「キーワードか。そうだな。そうかガミラスだ。ゲールはガミラス星出身だ」

「でも、それは架空の星でしょ？」

「検索してみよう。ガミラスは、14万8千光年離れた大マゼラン星雲にあると設定された架空の惑星。地表に大きな穴がいくつも開いていて、地表の下に第2の地表が存在すると設定されている。結局架空か」

「ちよっと待って」

「なんだい、雪」

「今日どこかでガミラスという言葉聞いたわ」

「どこだっけ？」

「思い出したわ。ゲルさんよ。彼、地図に知らない文字を書いて消したの。間違えてガミラス語で書いたって」

「あのゲルさんか」

「そうよ。なんで気づかなかったのかしら。ゲルさんの名前はざりゲールなのよ。ガミラス語を書けるのは、ガミラス出身だとすると当然だわ」

「でも肌が青くないぞ。日本人と同じ肌の色だ」

「馬鹿ね。日本人でも何か慌てる事が起きると【青くなる】って言うでしょ？」

「そうか。白人や黒人のような肌の色だと思う必要は無かったんだ。青くなったゲルさんは十分に青い肌のゲールなんだ」

「さっそくあの美術館に電話よ」雪は言った。

だが既に時間が遅かった。

ゲルさんは既に帰った後だった。

「明日の朝、話を聞きに行きましょう！」雪は宣言した。そうすると嫌とは言えない古代だった。

「でもガミラスは架空だろ？」

「馬鹿ね、ヒントって言ったでしょで？」

ゲルは掃除中だった。

「何だ昨日の大学生か。レポートは書けたかね？」

「それどころではありません。莫大な遺産が相続できるかもしれませんよ」古代は勢い込んで言った。

「馬鹿な。私は天涯孤独のゲルですよ」

「でも、ガミラス生まれのゲルさんなら、その資格があるのかも」

「なに。ガミラス？ 君はガミラスを信じるのかね？」

「ガミラスがあるのか無いのかは分かりませんが、ゲルさんがここに実在しているのは良く分かります」古代は力説した。

「詳しい話を聞こう」

事務室で話を聞き終えるとゲルは考え込んだ。

「ちよっと付いてきなさい」

ゲルは古代と雪を連れて特設展示室に行った。

「今、ちょうど特撮博物館が行われているので良かった。ここに1966年に宇宙戦艦大和を撮影したときのプロップが展示されている。見ての通りただの模型だ」ゲルは指さした。

「ではガミラスの架空だと？」

「いや。実は、ちゃんとした特撮で映像は作られているが、不思議なことにあれは実話なのだ」

「えっ？」

「私は、宇宙戦艦大和と戦った。バラン星の銀河方面作戦司令長官だったのだ。その後副官に降格されたがね。それでも宇宙戦艦大和と戦った。私に代わって司令になったのはドメル将軍という人でね。美術品を見る目

は無かったが、度胸はあった」

「ちよつと待って下さい。どういうことですか？」

「1966年のドラマ宇宙戦艦大和が実話だとすると、それを伝えた者が誰かいるはずなのだ」

「あれ、西暦2199年の話ですよ。どうやっても1966年には無理です」

「私は、過去に飛ばされてきたのだ。私が乗った円盤形旗艦のドメラーズⅠⅠ世は宇宙戦艦大和に船体を固定した上で自爆した。その自爆のエネルギーで過去の地球に飛ばされたものだと思う」

「無理のある説明です」

「それは分かっている。私自身でも信じがたい。でも仮にそれを事実だと認めよう」

「認めるとどうなるのですか？」

「もつと過去の地球にガミラス人が飛ばされていて不思議ではない。乗組員の誰かか、あるいはドメル指令本人だ。ただ作戦の詳細を知りすぎているので、ただの乗組員とは思えない。おそらくドメル指令本人だろう」

「まさか」

「そうだ。やっと話がつながった。その死んだという男は、ドメル指令本人なのではないかね？ 私がここにいることを知っていて、遺言で遺産を託したのではないかね？」

古代は横を向いた。「おい雪、瑞星平九朗の経歴を調べてくれ」

「もう調べているわ」

雪はスマホの画面を覗き込んだ。

「あった。瑞星平九朗って、大人になってから突然出てきているわ。幼少時の経歴は不詳……」

一同は顔を見合わせた。

「間違いない。ドメル指令だ」

「待って下さい。でもやはり納得がいきません。青い肌のガミラス人が、地球人として暮らしていたのですか？」

「その件だが、どうも恒星の光線の具合らしくてな。ガミラスの太陽の下か、それを模したガミラス艦の人工照明の下では青く見えるのだが、地球ではピンク色に見えるのだ」

「えっ？」

「そういえば、シュルツからの通信も、ガミラス人の肌がピンク色に見えるていた」

「待って下さい。シュルツって？」

「かつての部下だ。太陽系にいた」

「ならば本当に……」

「最後に重要な質問をする」ゲルが言った、

「なんでしよう」古代と雪は身を乗り出した。

「その男、アゴが割れていたかね？」

「割れていました」

「間違いない。ドメル將軍だ……」

古代と雪は顔を見合わせた。

ついに正解に到達したのだ。

解けないと思った青い肌のゲールの謎は解けたのだ。

「これって快挙よ。推理サイボーグの力を借りないで自力で謎を解いたのよ」と雪は嬉しそうに言った。

「推理サイボーグとは？ 宇宙戦艦大和には、手足が爆薬になったサイボーグ兵士がいたという情報があったが、そういう話か？」ゲルが言った。

「いえ、そういうわけではなくて……」古代が彼らの教官のことを説明した。

推理サイボーグというあだ名の助手がいる話を。

第2章

ロン毛の男に、線香の匂いがする男が近づいた。

「篠原、なにやってたんだ？」

「いやね。加藤さんから戦闘機のゲームソフト借りたところ」

「俺は貸してないぞ」

「【イケメンの加藤】の方ですよ」

加藤という男は2人学生にいた。沖田研の加藤は通称【イケメンの加藤】。小淵研の加藤は通称【寺の息子の加藤】だった。話しかけたのは【寺の息子の加藤】の方だった。

「ふーん。それはともかく、俺も1つ用事があったんだ」

「なんででしょう？」

「青い肌のゲールって知らないか？」

「なんすかそれ」

「いやね。うちの寺で葬式をやった人の遺言でね。でも意味が分からないもので、俺も頼まれてさ。意味を調べてくれって」

「そんなのググれば一発じゃないですか」

「じゃあやってくれよ」

「俺がやるの？」

「俺そういうの苦手だから」

篠原は一発で探し当てた。

「1966年のドラマに出てくる登場人物っすよ」

「どんな奴だ？」

「不詳なんだって。ビデオテープが残ってないとかで。そんなことってあるんすかね？」

「あるよ。新八犬伝だって3エピソードしか残ってないんだ」

「新八犬伝って？」

「昔の人形劇だよ。NHKの」

「知らないっすね」

「俺は知ってるよ。子供の頃、こういう悪霊を払うのが仕事だって親爺

から酔ってほらを吹いて見せられたから」

「悪霊ねえ」

「我こそは玉梓が怨霊く〜くっ！」

「何それ」

「もういいよ。じゃあな」

「へいへい」

【寺の息子の加藤】は別のクラスメートと話しに行ってしまった。

「篠原、加藤さんはなんて？」クラスメートの女の子、クールビューティーの山本が篠原に声をかけてきた。

「おまえ、加藤だけさんづけなのな」

「さんを付けて欲しかったら、ともかくそのロン毛を切れ。見苦しい」

「それだけのご勘弁」

「で、何の話だ？」

篠原は青い肌のゲールの話をした。

山本は考え込んだ。「もしかしたら、あの話と関係があるかも」

「あの話？」

「実は、深夜の自販機で青い肌の人間を見たという噂があるんだ」

「思い出した。おまえの友達がコスプレイヤーで全身青く塗ってアニメキャラクターやってたな」

「それはレイヤーのメルダちゃん。別の学科のお嬢さんだから別人よ」

「じゃあ何だよ」

「カップ麺の自動販売機のところに深夜現れて買っていくというんだ。

青い肌の男が」

「それは怪談かい？」

「友達は怪談扱いしていたけど、実際に見たのは更にその友達だし、良く分らないよ」

「加藤に話そうか？」

「いや、先に確認した方が良い」

「じゃ、2人で自販機に徹夜で張り込みか」

「変な期待はするなよ」

「しないしない。エッチな期待なんかしないから」

「本当だな？」

「本当本当。でもどこの自販機か分かるかい？」

「この辺で、カップ麺の自販機を置いてある場所は1つしかない」

「どこ？」

「駅の裏口の道をまっすぐ行つた突き当たりの、自販機コーナー」

「どこだ？」

「ほら、自販機が7、8台並んでいる場所。夜はあそこだけ明るいだろ
う？」

「ああ、あそこか。でも夜は人がいるところを見たことが無いぜ」

「そうだな。いつも人がいない」

「じゃあ、2人切りだな」

「だから変な期待はするなよ」

夜は冷え込んだ。

篠原は時計を見た。

もう午前3時だった。

「なあ、もう今日は来ないんじゃないか？ どつかであったかいラーメンでも食つて帰ろうぜ」

「気が早い。まだ3時をまわったばかりだ」山本がビシッと返事をした。

「せめて抱き合つて身体を温めないか？」

「却下」

「じゃあさ。せめて目の前の自販機であつたかいコーヒーでも買おうぜ」

「トイレに行きたくなるから却下」

「厳しいなあ」

「待て。誰か来た」

緑の制服を着た男が、周囲を警戒しながら自販機の前に来た。

自販機の照り返しで、男の顔が明るく見えた。

肌の色は青かった。

「ゲールさん！」と篠原が大声で呼びかけながら出た。「あなた、ゲールさんなんだろう？」

「馬鹿、まだ早い」山本が頭を抱えた。

その男はぎよつとして振り返った。だが逃げなかった。「確かに私の名前はゲールだが、なぜそれを知っている」

「やっぱりそうか」篠原は駆け寄った。「青い肌のゲールに遺産を相続って遺言した人がいるんだ。あんたのことだよな？」

「確かに私の肌は青いし、名前もゲールだが、ずっと東京に隠れ住んでいる私に遺産を残す人などいるものか？」

「隠れ住む？ どういうことだ？」

そこに山本も出てきた。

「この人の肌は青い。こんな人がうろろしていたら怪しまれるから、隠れて生活していたのだろう？」

ゲールはうなずいた。

「その通りだ。買い物は深夜の自販機に限定しておく」

「昼間は どうして いるんだ？」

「個人サイズの空洞を超空間に作成する道具があるのでね。そこに引っ込んで隠れているわけだ」

「そんな道具があるはずない」

「その通り。現在の地球の技術では作れない。私は未来のガミラスから来た男だ」

「どういうことだ？」

「私は3万隻の大艦隊を指揮してガミラスへの帰還途上にあっただが、途中で真つ二つに割れてな。デスラー総統を支持するグループは少数派だったので約30隻で独立して彼らとは別行動を取った。そのあと、デスラー総統と合流して作戦の支援を行ったのだ」

「デスラー総統とは？」

「ガミラスの総統だ」

「それで？」

「バラン星の亜空間ゲートに、艦隊のエネルギーを供給して稼働させた。宇宙戦艦ヤマトを亜空間におびき寄せ、内部で待ち伏せた総統の専用艦で仕留める作戦だった。だが、バラン星のコアのエネルギー源は破壊されていて、空間そのものが不安定だった。確かにヤマトは亜空間に追い込めたものの、その時に私が乗っていたゲルガメツシュも、潜水艦に撃沈されてしまったのだ」

「撃沈されたのなら死んだはずでは？」

「いや、不安定な空間で強引にゲートを動作させたのだ。意図しないゲートが副次的に発生していたらしい。ゲルガメツシュのブリッジから放り出された私はそのゲートに入ってしまったようなのだ。当然、制御されていないゲートは時間も空間もデタラメに機能する。それで過去に流れ着いたわけだ」

「でも、ガミラスもゲールもドラマの架空の話では？」

「そのことは、私も調べたよ」ゲールは頷いた。「君たちの暦で1966年に作られた宇宙戦艦大和というドラマは、確かに大筋で事実に似ている。普通に考えれば未来の出来事を過去に描くことはできない。だが、暴走した超空間ゲートが介在したとなれば話は別だ。宇宙戦艦ヤマトの情報を記録した記録キューブが1966年以前の過去の地球に落下した可能性を考えておる。それは無理のある話ではない」

「無理に思えるけど？」と山本は冷やかな目で自称ゲールを見た。

「いや。同じ暴走ゲートをほぼ同時に通った物体は、だいたい100年前後の範囲に出るのだ。地理的には千キロ以内だな」

「つまり、あなたが現在の地球に来たということは、記録キューブが50年前の日本に来ていてもおかしくないわけね？」

「そういうことだ」

「筋は通っているように聞こえるけど……」

「では私はもう行こう。他の誰かには見られたくないのでね」
数個のカップ麺を抱えたゲールは歩き出した。

その格好は未来の宇宙人にはとても見えなかった。

「もし、私に用事があるなら、メモをその自販機の下に入れておきたまえ」

ゲールは自販機の列を曲がった。

「待ってくれ。あと1つだけ……」と篠原は走った。

だが、角を曲がるとゲールの姿は無かった。

「どういうこと？」

山本も駆けてきてその光景を見た。

「消えてしまった……」

「人が消えるわけではないでしょ」

「人じゃない。未来の宇宙人だ」

周囲には隠れる場所などなかった。

だが、ゲールは忽然と消えた。

翌日、篠原と山本は、ゲールにメッセージを入れた。

遺言を残した人物の詳細を説明し、なぜ遺産をゲールに残そうとしているのか知りたいと書き添えた。

深夜の自販機で篠原と山本が待っているとゲールは現れた。

「心当たりは1つあるぞ」とゲールは言った。

「それはいつたい？」

「宇宙戦艦ヤマトの記録を入れたキューブには、他に現在のスマホにした通信機器の設計図と私のデータも入っていたのだ」

「だから何？」と山本は詰め寄った。

「その瑞星平九朗という人物。スマホの父と呼ばれているのであろう？」

「最初のスマホを作ったと言われているね」

「スマホで成功したお札を残すとしたら、私しかおらんだろう。キューブに入っていた人物データは私だけなのだ」

「なるほど」

「まあ、確かにお札を頂けるならそれに越したことはない。現在は巧妙

な偽金で買い物をしているようなものだからな」

「青い肌では働けませんからね」篠原はうなずいた。「でもそれは犯罪です」

「そうだ。だから遺産をもらって正当なこの世界の貨幣で対価を払えるならそれに越したことはない」

「では一緒に来て下さい。この話を持ってきた加藤に会わせませう」

「それはダメだ。人前には出たくない」

「ならば、我々が代理で動きます」と山本が身体を乗り出した。

「でも青い肌を見せない限り納得はさせられないぜ」

「分かった。ゲール本人だと認めさせるその時だけ出て行くことにしよう。ただし1時間だけだ」

「それまでは我々が」と山本が約束した。そしてスマホを差し出した。

「緊急連絡用です。使ってください」

「有り難い。有り難く利用させてもらおう」とゲールは受け取った。

ゲールが消えると篠原と山本は並んで歩き始めた。

「これからどうする？」自信たっぷりの山本に篠原は質問した。

「ともかく、加藤さんに連絡だ」

「分かった。朝一で捕まえよう」篠原はうなずいた。

「まだかなり朝が早いぞ。いいのかな」

「いいさ。寺の朝は早いんだ」

第3章

南部は真田を口説いていた。

「お願いしますよ。青い肌のゲールという謎を解いて下さい。助けて真田さん、あなただけが頼りです」

真田助手は表情も変えずに英語の論文を読んでいた。

「そういうことは、そういう専門家を雇いたまえ。こちらは、ただの大
学助手なのだぞ」

「そこをなんとか。誰に聞いても答えが出ないんですよ」
その時ドアをノックする音がした。

「どうぞ」と真田は言った。

入ってきたのは【寺の息子の加藤】だった。

「すみません。沖田研にはあまり関係ない話ですが」

「なんだね」と真田は顔をあげた。

話を中断させられた南部が後でぶすつと立っていた。

「小渕研の加藤です」

「寺の息子だね」

「そうです。寺の息子の加藤です」

彼は真田に依頼内容を説明した。

「これは偶然もあったものだね」

「といますと?」

「全く同じお願いを、たった今、南部君からされていたところなんだよ」

「まさか」

南部と加藤は顔を見合わせた。

「自分は長男の太一さんに頼まれて……」南部は言った。

「こっちは次男の二郎さんの依頼なんだ」加藤も言った。

「依頼主は違うけれど、内容は同じらしいな」真田はうなずいた。「ちなみに、実はもう1つ同じ依頼をうけとっている」

「誰からですか?」

「長女の瑞星久遠さんだ」

真田は論文を閉じた。

「しかし、引き受けるつもりはない。他の家のゴタゴタになどね」

真田はそうぴしゃっと言い放った。

その時、騒がしい声があった。

「加藤、ここにいたのか！」とロン毛の篠原とクールビューティーの山本が廊下を小走りに走ってきた。「見つけたぞ、青い肌のゲールだ！ 本当に肌は青かった！」

「本当か！」加藤の顔が明るくなった。

「青い肌の人間なんているわけは……」と南部が渋い顔をした。

その時、南部のスマホが鳴った。

「はい、南部」

相手は古代だった。

『喜べ南部、見つかったんだ。青い肌のゲールだよ』

「それは本当に肌の青い男か？」

『そうじゃない。地球の太陽の下で見ると肌色なんだよ』

南部は、嬉しそうにはしゃぐロン毛の男とクールビューティーを見た。

この2人が見つけてきたと称するゲールは肌が青いという。

しかし、古代が見つけてきたゲールは肌が肌色だという。

明らかに別人だ。

『南部、今どこだ？』とスマホの古代が質問した。

「真田さんの部屋」

『今すぐ行く』

通話は切れた。

1分と待たずに古代と雪が真田の部屋に駆け込んできた。

「良い機会だ」と真田は言った。「少し授業をしようじゃないか」

「じゅ、授業ですか？」一同は目を白黒させた。

「青い肌のゲールという遺言を残した瑞星平九朗という男。スマホの父と言われているね。彼の会社で作った第1号のスマホと言われるスマートフォンという商品。何が画期的だったか分かるかい？」

「スマホの第1号です！」古代は答えた。

「それは言ったままだ。機能の特徴はなんだろう？」

「通話できること！」篠原が言った。

「その前から携帯電話があるよ」

「じゃあネットできること」

「携帯電話にもWebブラウザ機能があつたよ」

「うーん……」一同は考え込んだ。

「実はスマホがスマホであることにはあまり意味がないんだ。でもスマートフォンはヒットした。どんな機能的な特徴でヒットしたのか」

「なんででしょう？」と雪はうながした。

「それはだね。実はロケール設定が過去にも可能だったのだよ」

「ロケール設定って？」

「地域設定だよ」と真田は説明した。

「過去に設定ってどういう意味ですか？」

「江戸に設定するとメッセージが全て江戸時代の言葉になったし、古代ギリシャという設定や、西部開拓時代のアメリカという設定もあつたね。

利用者が新しい設定を作ることのできたので、SFマニアは未来のドラマの設定をそのまま忠実に再現した設定も作っていたね」

「なるほど」

「ではなぜそういう機能性を彼は着想したのか。なぜだと思う？」

「未来の宇宙人から教えてもらった……ということではなさそうですね」

「実は少女ドラマシリーズにある1970年代のドラマ、【未来から現代への挑戦】にスマホそっくりの装置が出てくる。過去に設定できることも同じだ。子供の頃に見たドラマのロマンを再現してみせたのだろう」

「待つて下さい」と篠原が叫んだ。「あれは、未来から来た記録キューブに入っていた情報だってゲールさんが」

「小淵研の篠原君だったか？ 君はそのキューブとやらを実際に見たのかね？」

「いいえ」篠原は小さくなった。

山本が「馬鹿」と頭を軽く殴っていた。

「あの、そもそも瑞星平九朗はスマホを知っていたとゲルさんが」古代もおおずと言った。

「知っていた？」

「実は過去に飛ばされたドメル將軍が瑞星平九朗その人ではないかと」

「確かに瑞星平九朗の若い頃の記録はなく、経歴は不詳だ」真田は言った。「しかし、不詳であることと経歴が無いことはイコールではないよ。彼は大陸からの引き揚げ者だからね。いろいろな記録は終戦のドサクサでなくなっている」

「でも……」

「どうも、この問題を放置しておくでと学生諸君は勉強に身が入らないようだね」真田は立ち上がった。「この【青い肌のゲール】問題に少しだけ時間を使うとしようか」

「さすが推理サイボーグ！」

「待ってました！」

大学生達ははやし立てた。

「待ちたまえ。謎を解くのはあくまで君たちだ」真田は言った。「こういう場合、まず最初にするべきことは何だね？」

古代達は顔を見合わせた。

推理サイボーグがその気になれば謎はすぐに解明されると思ったが、そういうことでもないらしい。

「あの、真田さんは既に真相が分かっていますか？」

「8割ぐらいは分かったと思うよ」

「ではその答えは？」

「答を言ったら諸君らの成長の助けにならない」

古代は黙りこむしかなかった。

「はい」とクールビューターの山本が手を上げた。

「小淵研の……」

「山本です」

「山本君。君の答えは？」

「小渕先生からまず許可を取ります。真田先生から謎解きの講義を受ける許可をです」

「そうだ。それを忘れていた」と真田は言った。「その件はあとで話をしておくよ。質問は、その次にするべきことだよ」

「あの……」と森雪がおずおずと手を上げた。

「なんだね、森君」

「情報の1次ソースの確認ではないかと。我々は、みんな、直接遺言を聞いていないし、聞いた人からも話を聞いていません」

「正解だ」真田は言った。「まずは、みんなで瑞星邸を訪問して、詳しい話を聞こうじゃないか」

「でも、いきなり押しかけて会ってくれるでしょうか？」古代が質問した。

「そうですよ。相手は忙しい人達だし」と南部も言った。

「その点は大丈夫だ。長女の瑞星久遠さんから招待を受けているのだ。

同行者が少し増えても良いか問い合わせてみよう。ちよつとした昼食会だから、たぶん大丈夫だろう」

瑞星久遠は中年の独身女性だったが、十分に美しかった。古代と雪は会ったことがあった。大江戸ランドの館長だったのだ。

屋敷のテラスに用意されたテーブルに一同は案内された。

南部に調査を依頼した瑞星太一、加藤に調査を依頼した次男の瑞星二郎もいた。

料理はサンドイッチだったので古代はがっかりした。

何か凄いものが食べられそうな気がしたからだ。

だが一口食べて認識が変わった。

材料の質が違いすぎる。

あまりにも美味しいので、古代はアツという間に手に持ったサンドイッチを食べてしまった。

「さて」とハーブティーを飲みながら真田が言った。「直接遺言の話をお聞きしたいと思ひまして」

「そのご配慮は理解できます。伝言ゲームはすぐに話が変わってしまいますものね」久遠はうなずいた。

「遺言を聞いたのはどなたですか？」

「私、太一、二郎の3人です。ですが、録音されているので実際には弁護士など10人以上が聞いています」

「内容は本当に【青い肌のゲール】でしたか？」

「そこは議論になったところで、聞き間違いという可能性も否定しきれません。ですが、父は30代の頃にかなり熱心に宇宙戦艦大和とゲールについて調べていたのも事実です」

「あれは、少女少女ドラマシリーズ最大のミステリーと言われていましたからね」

「ええ。本放送でのみ流れ、再放送ではカット。しかも、現場で決まった映像なのでシナリオにも記載が無く、ビデオテープも残っていない。見た人は少なくないはずなのに、あまり印象に残っていない。しかも僅かな記憶もみんなバラバラ。本物のミステリーですわ」

「お父様が最も熱心だったのはその問題ですか？」

「スマホ作りにも熱心でしたわ。スマホ第1号を作ったのに、後から出てきた外国のリンゴコンピュータの製品に世界を席巻されたときは悔し涙を浮かべていましたもの」

「この話は重要だから学生の諸君はよく覚えておくように。いくら技術的に素晴らしいものを作っても、アピールが下手だと、後から出てきた後発の会社に全部持って行かれるぞ」

暢気に聞いていた古代は慌てた。

「は、はい！」

「さすが、工業大学の学生さんは心強いですわね」と久遠がクスクス笑った。

「あ、ありがとうございます」

古代は慌ててお礼を言ったが、となりの雪からは太ももとつねられた。

「さて、【青い肌のゲール】に話を戻しましょう。この言葉はもう決定された解釈でしょうか？」真田は言った。

「いいえ。死に際の父は口もよくまわっておらず、非常に聞き取りにくい声でした」

「たとえば、【鮫肌のガール】のような他の言葉かもしれないわけですね？」

「ガールはそうかもしれませんが。その発音ははっきりしませんので、最初の言葉は間違いなく【あ】です。【さ】ではあり得ません」

「姉御肌のガール？」と古代は言ってみた。

「それは無理がありすぎるわ」と雪が小声でたしなめた。

「父が趣味で愛好したものを調べ上げ、類似の言葉をピックアップしたところ、【青い肌のゲール】が最も近いという結論になりました。次点はどれもあまり近くない言葉ばかり」

「なるほど。ところで皆さんはスマホフォンはお使いで？」

「教育上良くないという理由で持たせては貰えませんでしたわ」と久遠は言った。「使い込んだことはありませんの。兄弟姉妹みんな同じですけど」

「なるほど」真田は学生達を見回した。「そういうことだ。諸君、次はどうすれば良いと思うかね？」

【青い肌のゲール】のゲールが最も近いなら、ゲール本人を連れてくるべきだと思います。彼がここに来れば新しい進展があるはずです」古代は力説した。

「本物はこっちだ」と篠原も立ち上がった。「連れてきますよ、本当に本物のゲールを」

古代と篠原がにらみ合い、雪はおろおろし、山本は白けた顔で篠原の頭を軽く殴った。

「本物ゲールと対面、面白そうですね」と久遠は言った。「本当に青い肌の人間がいますの？」

「います！」と篠原は言い切った。

「太陽光線の関係で地球では肌色ですが、確かにガミラスでは青だった

そうです」と古代も力説した。

「では、明日またここでゲールさんが対決するということでよろしいかしら？」

「ゲールさんの都合を聞いてきます」と古代は言った。

「連絡を取ってみますよ」と篠原も鼻息が荒かった。

「私も興味が出てきたよ」と真田も言った。「本当に青い肌の人間が出てくるというのなら私も見学しよう」

対決の準備は整った。

翌日のテーブルは壮絶になった。

何しろ東京都現代美術館で働くゲールさんと、深夜の自動販売機に出没するゲールさんが揃ったのだ。

「この偽物が！」

「そっちこそ、いい加減なことを言うな！」

即座に2人は言い争いになった。

「私はドメル指令と一緒に自爆したのだっ！ あいつの言う経歴など嘘っぱちだ。何がデスラー総統の作戦でゲートを動作させただ。そもそもゲートとは何だ。バラン星にそんなものは無かったぞっ！」

「何を言うか。バラン基地の司令官だった男がバラン星の設備を間違えるものか！ ゲートは確かにあった！ ドメルは総統暗殺容疑で本国に召還されたのであって、私は陰謀に加担していないから同行などするはずがない」

「総統暗殺とは何だ。そんなことは1つも聞いたことが無いぞ。いい加減な歴史をねつ造するな」

「なんだと！ そもそも肌も青くないのにゲールを名乗るな！」

「おまえこそ、その青は塗ってるだけじゃないのか？ 少し肌色が見えているぞ」

「人間に誤魔化すために肌色に塗った部分が残っていたただけだ。ここまではタクシーで移動したんだぞ！」

真田は静かに笑った。「さて、古代君、篠原君、君たちも何か言い分があるのではないかね？ 森君と山本君でもいいぞ」

「あの……」古代は言った。「我々が連れて来たゲルさんは、筋の通った話をしてくれました。突飛ではありませんが」

「このゲルは消えることができます」と篠原の力説した。「地球の技術でそんなことはできません」

「消えるって、消える瞬間を見たのかよ」

「いや、見ていないが角を曲がった瞬間に見たらもういないんだよ。こんなことは人間にはできないだろう？」

「トリックじゃないか？ 人体消滅トリック」

「ちゃんと調べたさ」

「深夜の真つ暗な路地を？」

「ちゃんと道を調べたよ。それより、そっちこそおかしいぞ。光線の具合ってなんだよ。肌が青くないだろう」

こちらも口論が始まってしまった。

「さて、この場はどう收拾しましょうか」と真田は久遠に語りかけた。

「詳しい話を聞くとどちらも突飛ではありませんが、筋は通っています」

「そうですね」久遠はうなずいた。

「もし、古代説が正しいとすると、あなたはドメル將軍の子供ということになってしまう」

「良いじゃありませんか。夢があつて」

「確かに」

「では、太一さん、二郎さん。提案があります」と久遠は言った。

「なんででしょう」

「聞きましょう、姉さん」

「遺産は三分分して、1つはあちらのゲルさんに。もう1つはこちらのゲルさんに。残りはゲル基金として残し、将来真のゲルが分かるまではこちらの家で管理するというのはどうかしら？」

「正確に三分分？」太一が質問した。

「ええ、正確に三等分で。量を増減するとしこりを残りますでしょう？」
「いいだろう。妥協するよ」と二郎が答えた。

「俺もだ」と太一もうなずいた。

「では、その方向で調整を……」と久遠が言いかけたとき、執事が来た。

「なあに？ 今取り込んでいるのだけど」

「それが、我こそは青い肌のゲールだと主張する者が押しかけてきておりまして」

ゲール対ゲールの口論、古代と篠原の口論が止まった。

全員が執事を見た。

久遠は目を見開いていた。「候補が3人に増えてしまったわ。今の提案は無しね。また案を練り直さないと」

ただ1人、真田だけが超然とハーブティーを飲んでいた。

第4章

大学の真田の部屋に、久遠が訪問していた。

「お手上げですわ」と久遠は言った。

「ゲールの人数は現在何人になりましたか？」

「前回は101人とお伝えしましたわよね」

「ええ。101人ゲール大行進と」

「今はもう、250人を超えていますわ」

「それは多すぎる」

「ええ。ですから、話に整合性が無いゲールは全員候補から落としました。100人に絞り込んで本物のゲールを絞り込む作業をしています」

「上手く行っていますか？」

「いいえ。どうしても上位30人ぐらいは甲乙が付けがたく、決定打に欠けます」

「水を掛けるという方法は試されましたか？」

「もちろんです。青い肌を塗っただけの連中はそれでボロが出ました。

そういう安易な偽物はもう排除して、その上で上位30人は選べないほどみなゲールらしく見えますわ」

「では正解をお教えしましょう」

「誰が本物なのかご存じなの？」

「いいえ。それは知りません。でも正解は最初から分かっていたのです」

「教えて下さい」

真田は久遠に耳打ちした。

「まさか、それが正解？」

「はい。あなたの口から発表して下さい」

「それはダメだわ。それは遺産争奪戦で自分に都合の良い話をでっちあげたと思われるわ。真田さん、あなたの口から発表して」

「そこまで兄弟との信頼関係がありませんか？」

「他人より恐いのが肉親です」

「では、1回だけ付き合って差し上げます」

「感謝します」

瑞星の大きな庭に、100人のゲールが揃った。

古代、雪、南部、篠原、山本、加藤がオブザーバーとして同席した。

そして、故人の子供である久遠、太一、二郎の3人。

あとは、真田だった。

古代が手を上げた。

「なんだね、古代君」

「正解が分かりました。言ってもいいですか？」

「言ってみたまえ」

「候補が多すぎるので悩みましたが、ほとんどは落とせると気づきました」

「というと？」

「自分からゲールだと言った者達は全員たぶん偽物です」

「では誰が自発的にゲールと言わなかったのだね？」

「我々が見つけたゲールさんは、雪が気づくまでゲールだとは分かっています」

篠原も立ち上がった。「そういう意味では俺達が見つけたゲールも同じだ。こちらから自販機を見張って見出したんだ。自分から遺産目当てで押しかけてきた連中とは違う」

すると、100人のゲール達から抗議の声が出てきた。

「偽物が遺産を手にしそうだから本物として名乗り出たのだ」

「おまえこそ偽物だろう」

「私こそ本物」

「デスラー総統万歳！」

「バラノドン大好き！」

真田が制止した。「みなさん静粛に。余りうるさくすると偽物と見なします」

一度は黙りこんだ。

真田は助手の島を呼んだ。

「島君、研究結果を報告してくれたまえ」

「はい、真田さん」と島はマイクを手にした。「さて、少年少女ドラマシリーズの宇宙戦艦大和は2回リメイクされています。1回目は1974年でタイトルは宇宙戦艦大和。劇中にゲールは登場しています。このゲールは七色星団の決戦でドメル指令と一緒に自爆して死んでいます。つまり、古代が見つつけてきたゲールの主張と完全に一致します。そこにいる100人のゲールの3分の1ぐらいも同じです。冥王星前線基地のシュルツは肌色なので、ガミラス人は肌色に見える場合もあるという解釈も妥当です。それから、2回目のリメイクは宇宙戦艦大和2166というタイトルで、2013年です。こちらのゲールはドメルと一緒に死なず、最終的に反乱者となったデスラー総統に協力して宇宙艦で粛正されます。そちらの篠原君が見つつけてきたゲールの供述と完全に一致します。そこにいるゲールの3分2も同じ解釈です」

「では島君の解釈はどうかね？」

「オリジナルのゲールは本当にどうでも良い脇役だったようです。当然誰の印象にも残りません。幻になってしまったので今では有名ですが、放送当時には話題にもなっていません」

「それで？」

「実は調べているうちに分かったことがあります」

「なんだね？」

「【青い肌のゲール】は誤植が一人歩きしたもので、本当のサブタイトルは【青い旗のゲール】。新聞の縮刷版を調べて分かりました。本放送時は【青い旗のゲール】で新聞の番組欄に載っています。誤植のある番組資料が出回った後で行われた再放送から【青い肌】に変わっています。リメイクの頃は研究が十分ではなく、青い肌のキャラクターだったと解釈されてゲールの肌は青かったようです。まあガミラス人は青いので、順当と言えばそうですが」

「島君、そこまでよく調べたね」

島は頭をかいた。「二晩徹夜してネットで調べた上で、静岡に住んでいるマニアのところまで車を飛ばして話を聞いてきました」

「ご苦労さん」

「では失礼します」

島は下がった。

「というわけだ。君たちの主張は一通りチェックしたが、全員が1回目のリメイクか2回目のリメイクのストーリーを語っているだけで、1996年にオリジナルのストーリーは語っていなかった。もしも、1996年のドラマが事実通りだとするならば、その事実を彼らは体験していないことになる。つまり全員が偽物だ」

「そんな！」

「まさか！」

「でも納得がいきません」と古代は言った。「ゲルさんは、親切で情報にも詳しくかったのに」

「もういいんだよ。私は雇われてゲールの演技をしただけの男だ」

「でも、どうして真田さんには分かったのですか？」

真田は答えた。「彼は少し詳しくすぎた。長年、博物館や美術館をまわった人間にしか分からないようなことを知りすぎていたよ。突然地球に来た宇宙人に分かることではないよ」

「でも、それでも分かりません。ゲルさんは自分からここに来たのではありませんよ」

「そうではない」真田は言った。「自分から名乗り出ると怪しまれるから、君たちが発見するように仕組まれたのだ。南部はそのための道具に利用されたのだろう。大江戸ランドに満足していない京葉技術大学の学生を現代美術館に行くように仕向け、ゲルさんとの出会いを演出した上で南部からゲールの情報を与えるわけだ」

「まさか、現代美術館のことを教えてくれた大江戸ランドの職員までゲルだなんて……」古代は青くなった。

「古代君、ちゃんと思いい出して反省してよ」雪がむくれた。

古代は考え込んだ。

「自分も納得いきません。あのゲールさんは本当に消えることができたのですよ。水をかぶっても、肌の青は落ちないし」篠原も力説した。

「自販機コーナーで姿を消したゲールだね？」と真田は言った。

「そうです」と篠原はうなずいた。

「本来トリックのタネを明かすのは本意では無いがね。この場合は仕方があるまい。実は島君に現地を見てもらったのだが、最近自販機を設置して撤去した跡が残っていたという」

「だからなんですか」

「自販機コーナーに置かれていた自販機の1つは、中身が空のダミーの自販機だったのだよ」

「は？」

「角を曲がって視界から消えた直後に、そのダミーの自販機に入って姿を隠すと、それで人体消滅トリックの完成だ」

「青い肌はどうですか」

「水をかけて首実検をすることは予測できたのだろう。水では溶けない塗料で肌を塗ったのだと思うよ。ただし、それでは皮膚呼吸もできなくなる恐れがあるので長時間は良くないだろう。だから時間制限付きだ」

「確かに、彼からは時間制限を要求されましたが……」

「推理サイボーグも人が悪い。トリックを全て暴かれてしまいましたね。」

ゲールのふりをするという仕事も終わったようなので、それではこれで御免」

消滅トリックを使った青い肌のゲールが立ち去っていった。

その場で消滅することはなかった。

「そんな気はしてたのよね」と山本は白けた顔で言った。

雪は口をおさえて自分の感想を飲み込んだ。

残ったゲール達も、ほとんどが良いチャンスとばかりに後に続いた。

「でも、このゲールも自分からゲールだと名乗り出たわけではありません」と篠原は強調した。

「古代君と同じトリックを仕掛けた人がもう1人いたんだよ。おそろく古代君を引っかけたのが太一さんと、篠原君を引っかけたのが二郎さんだ」

「どう引っかけたというのですか」

「自分から名乗り出ると怪しまれるから君たちに発見させたのさ。小淵研の加藤君も、上手く利用されたのだろう」

「そんな……」

「ここまで来た以上、もう言い逃れはできないわよ」と久遠は太一と二郎に向き直った。「偽ゲールを仕立てたんでしょ？ 認めなさいよ」

「ああそうだ。認めるよ」太一はうなずいた。

「仕方が無い」二郎も同意した。「でもここまで言うなら説明して欲しいな。本物のゲールはどこにいるんだ！」

「本物のゲールとやらはいるかもしれないかもしれないかもしれません。しかしこの問題とは関係ありません」

「関係ないだと？」

「この遺言を皆さんは誤解されている」

「他に解釈が無いか、何度も検証したぞ」

「青い肌のゲール」と皆さんは解釈しましたね？」

「そうだ。子供の頃にゲールの名前は何回も父から聞いた」太一は叫んだ。

「その通りだ。他にどんな言葉があるというんだ」二郎も叫んだ。

「生前の故人からスマフォーンの話は聞きましたか？」

「そりや何度も聞いたが」

「聞いた回数はゲールとどちらが多いですか？」

「そりやスマフォーンだ。当たり前だろう。そっちは仕事なんだから……」

真田はポケットからビンテージもののスマホを取り出した。

「これがスマフォーンの現物です。特別に博物館から借りてきました」

真田はスマホを見せた。

「それがどうした。それなら何回も見たことがあるぞ」

「スマホフォーンの特徴はロケール設定で過去や未来のロケールを設定できることです。だから現代日本から江戸時代に変更するも簡単です。これと言葉遣いも江戸の言葉になるし、暦も旧暦です」真田は設定を変更してみせた。

「それぐらい知ってる」と二郎は叫んだ。「こっちは、それを作った偉人の子供だぞ」

「では自分でやったことは？」

二郎も太一も黙りこんだ。

真田は改めて設定画面に戻った。

「これが江戸時代の設定です。このアイコンは、葵の旗です。葵は徳川家の家紋で、江戸時代を象徴するものとして採用されています」

「だから何だ。そのアイコンなら見たことあるぞ」

「マニアの間では通称【葵旗】です。そして、当時はスマホを【葵旗ロケール】に変更して旧暦でスマホを使うのが流行りました」

「だから何だ」

「遺言は【青い肌のゲール】ではありません。【葵旗ロケール】だったのです」真田は言った。

「なんでそれが遺言なんだ。遺言は【青い肌のゲール】だったはずだと太一は言った。

「待ってくれ兄さん。【あおいはだのげーる】と【あおいはたろけーる】なら、確かにそっくりだ」二郎が顔色を変えた。「遺言の発音は少し曖昧だから、【葵旗ロケール】でも筋が通る」

「でも意味分からないよ。【葵旗ロケール】って何だよ。スマホの江戸時代の設定の名前じゃないか。スマホは遺産を受け継がない」

「そうだ、スマホは遺産を受け継がない」と真田は言った。「では良い授業だからもう一度古代君達学生に質問してみよう」

「えっ」古代はいきなり矛先が自分に向いたことに焦った。

「瑞星平九朗にとつての【葵旗ロケール】とはいったい何だったのだろう」真田は質問した。「それはスマホであってはならない。ソフトやデータ

でもない。現実存在する何かでなければならぬ。遺産を活用出来る何かである必要がある。はたして何だろうか？」

「ええと。タイムマシンで行った過去の東京？」

「この世に存在しない機械を持ち出すのは答えとして感心しないな」

篠原が叫んだ。「ゲートだ、ゲートを通して過去に行くんだ」

「篠原君。同じことだよ」

篠原は、今回は山本に殴られなかった。しかし、肘鉄を食らっていた。

「失礼」とゲルが古代の横に出てきた。古代と雪が見つけたゲールだ。

「罪滅ぼしにその答えには私が答えたいと思う。本物のゲールではないが、本物の博物館美術館のマニアの私には答えられると思う」

「ゲルさん！」古代と雪が叫んだ。

「まあ良いでしょう。学生がお世話になったことですし、では答えて頂きましょう」と真田はうなずいた。

「瑞星平九朗はスマフォーンの【葵旗ロケール】が小ブームを起こしたことに気を良くし、スマホの中に再現された江戸時代を現実に行こうとした。その結果生まれたのが【舞浜の大江戸ランド】です。大江戸ランドが計画された時の標語は、【葵旗ロケールを現実】で、プロジェクトの名前は【葵旗ロケール・プロジェクト】だったのです。瑞星平九朗にとつての【葵旗ロケール】とは、【舞浜の大江戸ランド】だと思っ間違いなと思います」

「しかし、それなら【大江戸ランド】と遺言するのでは？」

「彼がプロジェクトに深く関与していたのは、その名称が決まる前です。プロジェクトが【葵旗ロケール】と呼ばれていた時代です」

真田が大きくうなずいた。「さすがはよくご存じで」

太一と二郎が驚いて、久遠を見つめた。

「悪いわね」と久遠は言った。「つぶれかかった【舞浜の大江戸ランド】はこれで蘇るわ。でも、自分のためにお金を使うわけではないことは分かっ

「信じられない」太一は言った。「親爺が大江戸ランドと言わずに葵旗ロ

ケールと言ったのを聞いた記憶が無い」

「それは兄さんが大江戸ランドに一切興味を示さなかったからだ」

「なに？」

「思い出したよ」と二郎はうなだれた。

「何をだよ」

「小さい頃、親爺が【葵旗行くか】と言って大江戸ランドに連れて行ってくれたことを。すっかり忘れていたよ。まあ、当時は葵旗が理解できていなかったけどな」

【葵旗】ですって？」久遠も身を乗り出した。「そんな経験無いわよ」

「派閥争いで社長職から外された時期だろう」と太一は言った。「あの頃だけは親爺も暇だったのだ」

3人は故人の思い出に浸ってうなだれた。

エピソード

彼は懐かしい深川を再訪していた。

青い肌を隠した肌色の粉が汗で流れないかだけが心配だった。

勝手の分からぬ異星で一度は死にかけて彼だったが、彼の語る思い出話が面白いと出版社に目を付けられ、本を書くことを勧められた。

【バラノドン飼育日誌】は幻想的と評価され、かなり売れた。しかし、全部実話だった。

2冊目は、【嫌いな上司と付き合う方法】だった。これもかなり売れた。しかし、これもドメル指令との付き合いを描いたほとんど実話だった。

彼が深川に来たのには理由がある。

飢えた彼が食した深川めしの味が忘れられなかったからだ。

彼は記憶にある食堂のドアを開いた。

「らっしやい」

「私を覚えているか」

「ゲールさん！ どうしていたんですか？ 肌も青くないし」

「肌はドーラン。今は、剣持流左衛門と名乗っているよ」

「またそれはどうして？」

「さすがに、ゲールと名乗ると変な目で見られるのでね。ケトルからケで始まる姓と、ルで始まる名前を名乗ったわけだ」

「なるほど。じゃあ、あの人気作家の剣持流左衛門とはゲールさんのことだったわけですね」

「人気作家といっても、いまでもテニオハを間違えるとお叱りを受けているよ」

「ところで、また深川めしを食べていってくるかい？」

「そのために来たんだ。またあの思い出の深川めしを頼むよ」

「がってん、承知」

店内のテレビでは、瑞星平九朗の遺産問題に決着が付いたと報道していた。

「まだ、あれ決着してませんでしたか」

料理しながら店主が言った。

「あれとは？」

「瑞星平九朗の遺産問題でさあ」

「そんなに興味深いのかね？」

「青い肌のゲールを探しているって、そりやもう一時期はワイドショーも大騒ぎ。あの時、ゲールさんも行っていたら本物と認められて遺産がもらえたんじゃないですか？ 肌も青いし。名前もゲールだし」

「よしてくれ。そんなマスコミの大騒ぎに付き合う気は無いんだ」

「勿体ないなあ」

そうだ。大騒ぎに付き合う暇などない。

ゲールは確信していた。

この東京と一緒に飛ばされてきたガミラス人は自分だけではない。ただし、時間差はあったようだ。おそらく、考えることは誰しも同じだ。自分の経験をフィクションとして発表して仲間を探している。昔あったという宇宙戦艦大和というドラマが実体験に酷似しているのもそのせいだろう。ただし、あれに登場したと言われる【青い肌のゲール】は、実際にはゲールではなくゲルだ。名前が似ているのでよく間違えられたが別人だ。ゲルはヒス副総統の反乱に同調して、その結果粛正された。ドメル指令と一緒に自爆を選んだゲールとは全くの別人なのだ。

だが、こうして生き延びた以上は、仲間を探したい。

ゲールが本を書いているのも同じ理由だった。

ゲールが書いた【バラノドン飼育日誌】も、【嫌いな上司と付き合う方法】も、読む人が読めば実話と分かるのだ。

だから、他のことに興じている余裕などはないのだ。

ただ、美術館は癒しになった。原始的とはいえ、一部のアート作品はゲールに癒やしを与えたのだ。

「私の興味はバラノドンと美術品にしかない。地球にバラノドンはいない以上、あとは美術品だけだ」

「ならば東京都の現代美術館がすぐ近くですよ。行ってみたらどうです

か？」

「例の博物館のような場所なら行かないぞ。ほら、あの東京の昔のなんとかを再現したなんとか資料館」

「江戸の街並みを再現した深川江戸資料館ね。違いますよ、もっと洗練された現代美術を展示してます」

「そうか。前に来たときは他のことで頭がいっぱいで気づかなかった。では後で寄ってみよう」

「それがいいですよ」

彼が深川めしを食べ終わって店を出るとき、入れ替わりに赤い矢印の上着を着た大学生が店に入った。黄色い服を着たセクシー美女と一緒にだった。

「親爺、深川めし2つ」

「へい」

「大学のレポートで、昔の漫画の黒い犬を選んでここまで来たけど、面白くないね」

「黒い犬？ ああ、のらくろね。川の向こうにある田河水泡のらくろ館に行ったのね」

「そうそう。のらくろ館。まさか、商店街にまで黒い犬が並んでいるとは思わなかったよ」

「古代君たらそればかり」

「雪だつて驚いていたじゃないか」

店主が深川めしを2つ出した。

「さあ、どうぞ。冷めないうちに召し上がれ」

「いただきます！」

大学生はさっそく割り箸を割った。

終わり

解説

本作で東京都現代美術館が印象的な舞台として使用されている理由は2つある。1つは、【ゲール東京に現る】の元ネタとなった【巨神兵東京に現る】の初上映場所であることだ。もう1つは、宇宙戦艦ヤマト（1974）のゲールのコレクションのような美術品があってもおかしくない場所として、現代美術館を想定したことだ。

本作は本編中に【101人ゲール大行進】という言葉があるが、実は101人のゲールを登場させている。最終的な推理ショーに呼ばれたゲールが100人で、プロローグとエピソードに出てくるゲールはそれとは別人なので合計101人という計算になる。

本作の博物館美術館は基本的に全て実在しているが、【舞浜の大江戸ランド】だけは架空である。

少年少女ドラマシリーズは完全に架空であり、少年ドラマシリーズをモデルとしている。それぞれのタイトルには元ネタがある。ただし、1966年の宇宙戦艦大和だけは完全に虚構である。

1966年の宇宙戦艦大和は完全に架空の設定であるが、1966年である理由は、世の中に【ヤマト1966くらい】という言葉が存在することによる。ただし、内容はひおあきら版宇宙戦艦ヤマトが実現されていると想定されている。ひおあきら版宇宙戦艦ヤマトのゲルは、ゲールとは別人という解釈である。

スマホの歴史に関しては何も架空なので、参考にされないように。本シリーズでは基本的に宇宙戦艦ヤマト2199の話題や設定を扱わない方針であるが、本作ではその方針を曲げて使用している。その理由は、宇宙戦艦ヤマト2199由来の設定を持つゲールを登場させるためである。このゲールを探索する者達として、宇宙戦艦ヤマト2199にのみ登場する人物を配置した。

本作は推理サイボーグの事件簿シリーズの第5作ではあるが、実際の主人公はゲールだ。なぜなら、推理サイボーグの事件簿シリーズとして始まったものではなく、トーキョーゲールというタイトルを思い付くのが先で

あつたためだ。

本作に仕込まれた最大のトリックは、推理サイボーグは間違えていないにも関わらず本物のゲールは発見されないという皮肉にある。推理サイボーグに与えられた課題は遺言を正しく解釈することであり、本物のゲールを探し出すことではなかったのだ。しかし、物語は本物のゲール探しの物語として進行する。

遠野秋彦作品宣伝

小説・推理サイボーグ・真田の事件簿・8作合本【Kindle版】発売中。

<https://www.amazon.co.jp/dp/B06VT95GDW>

収録作品：

1. 装甲飛行船レース殺人事件
2. すべてがゼロになる
3. 推理サイボーグの敗北
4. 徳川彦左衛門と徳川埋蔵金の謎
5. 不思議なメルダ
6. 伊東に行くならマトヤ
7. 完結編・ラブレターフロム真田　↳真田対ハイルブロンンの怪人↳
8. 外伝・推理サイボーグ・オブ・ザ・デッド